

上羽勝衛纂  
小學會話篇

二

特34

939

18. 7. 5

雨



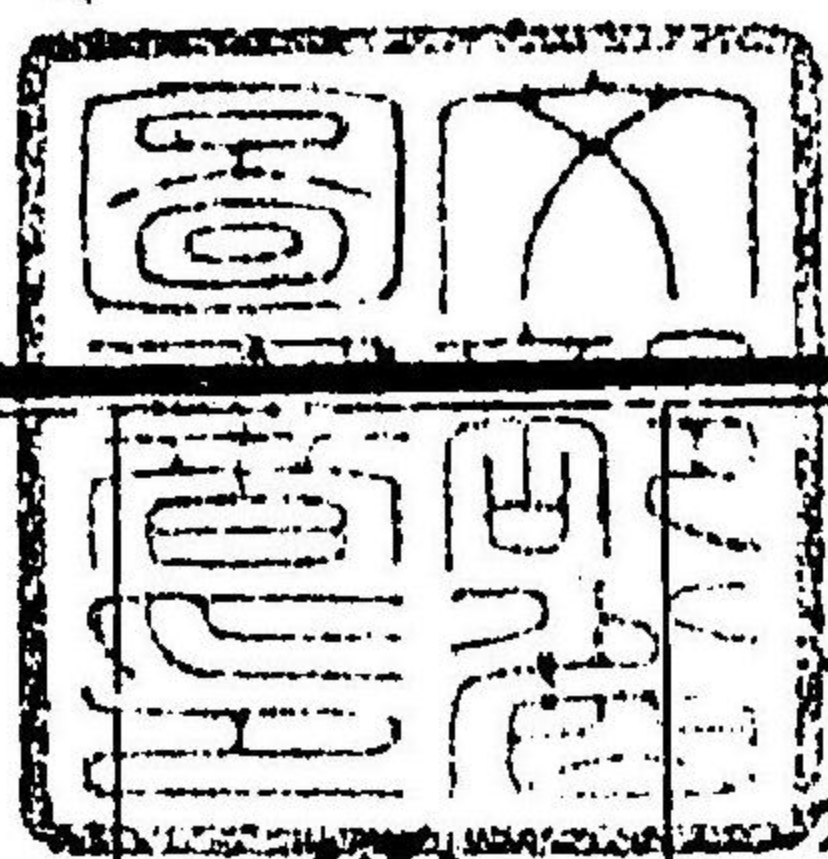
上羽勝衛纂小學會話篇卷之二

第

私共も。今日。遊歩。致し

やう。○何處へ。往きま

か。○近き岡まで。往きま





○私ハ。今まで。遊歩。致しま

た。○私も。御供。致しま

○此處ハ。實小。好き。風景で。

御坐りませ。○彼の。森の陰で。

休息。致しま。○彼の。

櫻も。美しく。咲ました。○鶯が。

能く。嘯ませ。○私も。昨晚。杜

鶯を。聞ました。○私ハ。少し。疲

ま。○最う。そ。還

りませ。○何方も。御愉快



で。御坐りま〜らう。〇何れ。

明日

第二章

彼方様ハ。何の御用で。御坐り  
ま〜。〇其許に。禮服の。仕立を。

頼みま〜。〇畏りま〜た。十日の  
内ハ。差出ま〜。〇時計屋で。御  
坐りま〜。今日も。御用ハ。御坐  
りま〜せん。〇其時計ハ。何程  
位〜ま〜。〇之ハ。品グ宜ク。御



坐りまほしうら。少し。直段か。  
張ります。夫も。餘り高い。最  
些と。御引き。筆屋と。呼びよ  
遣ツカませ。只今。参マりました。○  
其毫へ。何程さるや。價と。引詰

て。申しませい。○好い筆と。撰  
りて。五本。買ひましやう。○有  
難う。存ゾまほ

第三章

夫へ。何の花で。御坐りませ。○



私へ。梅の花を。好まよまよ○私  
 の。庭ニの梅が。奇麗小。開きよし  
 た○彼方よ。桃の花へ。未開き  
 ませんか○私も。杏の花が。好  
 べ。御坐りまよ○海棠も。美し

と。御坐りまよ○櫻は花が。第  
 一で。御坐りまよ○牡丹も。見  
 事で。御坐りまよ○蘭は。品の  
 好き花で。御坐りまよ○私へ。  
 此間。芍薬を。植へまよした○松



ま。殊更。善い木で。御坐りま  
す。○私方ふへ。竹が。澤山。茂り  
ました

第四章

彼方へ。料理を。爲されままこの

○私へ。少へ。心得て。居まま  
○俎板と。庖刀を。持て参れ○  
刺身皿を。下さい○醬油。鹽。酢。  
砂糖ふとも。差出せ○此魚へ。  
未ど。生て居まま○夫へ。鯉で。



御坐りまますろ ○鱗と取らまぞ。  
汁に。爲され○其鯛を。刺身と  
吸物ふ。爲るが宜い○此ハ。鹽  
焼グ。宜しうらふ○此ハ。糝漬  
に。致しましやう

第五章

彼方々。酒を。御好みか○私を。  
少し飲まは○君ハ。酒が。御強  
い○私を。大小。酔エヒました○最  
少し。如何で。御坐りまは○聊。



辭退ハ。致ません○定めて。甘アマ  
き物と。御好で。御坐りまーや  
う。菓子と。出ーませい○餅菓  
子ゴ。御好歟。水菓子か○何小  
ても。御取りあされ○私小。栲

を一ツ。下され○小刀と。上げ  
ます。皮と。御むらあされ○此  
ハ。大き小。甘う。御坐りまー

第六章

彼方カ。久ク。御目メ。懸



りません。○嘸ぞ。御學文が。御  
上達で。御坐りまゝ。やう。○此  
御逢申してより。一年餘ふ。あ  
りまゝ。○何卒。御上がり成さ  
れ。○茶を。一ツ。御上かりあされ

○此方の。御茶は。結構で。御  
坐りまゝ。○最一杯。如何で。御  
坐りまゝ。○有難ふ。存トます。  
最早。私ふは。○左様か。上げ  
まゝ。○今日多。邂逅の御



出。御寛りと。御話下され。私  
も。只今より。何某方小。用事が。  
御坐りまきから。御暇。申しま  
さる。

第七章

私も。羽織を。拵らぐ度。存トま  
き。羅紗か。又ハ。縮緬で。御坐  
りまは。私も。紬縞を。好ま  
ま。彼方も。何を。御好。かさる  
ろ。私ハ。羽二重ろ。絲織が。欲



小倉會話集 卷之三  
一。く。御坐りませす。○彼方の。着  
物も。未だ。新ら。く。御坐りま  
は。○私のも。大分。垢付きま  
た。○之を。洗濯。遣つて。下さ  
を。○夫は。丈夫な物で。御坐り

海は。只今。此様な品。有り  
ません。○君の袴も。善く。似合  
ませ。○彼方の帯は。博多織  
御坐りませり。○私に。太織  
で。御坐りませり。○私に。洋服も。



拵へまゝした。○私の肌着ハ。鳴海  
絞りで。御坐りませ。○彼方の衿  
も。結城縞で。御坐りませ。○  
左様で。御坐りませ。

第八章

君の靴も。何程で。御買ふされ  
た。○此ハ。三圓五十錢。少。手  
に入りました。○私も。持ちませ  
ぬ。○彼方も。足ふも。嵌まりま  
さ。○草履ハ。簡易か。履き



物で。御坐りまはし。○今日も。路  
が惡い。木履でなきてゐる。歩  
るけません。○私を。草鞋を。用  
意。まゝ。た。○最早。雪踏ふても。  
宜い。○此方の。下駄を。拜借

し。まゝ。やう。明朝。御返し。申し  
まはし。○何ぶても。御序でふ。御  
返却。下さる

第九章

冠へ。高價を物で。御坐りまはし



○近來ハ。種々。様々の帽子ガ。  
 流行まほ。○私ハ。今朝。髪ヒ。鑷  
 とま。した。○彼方の髭ハ。甚ど濃  
 い。剃刀ヒ。切まほ。う。○櫛ヒ。  
 黄楊ガ。好く。御坐りまほ。○石

鹼ヒ。能く。垢ヒ。落。まほ。○  
 私ヒ。手拭ヒ。忘れま。した。どふ  
 ぞ。彼方のヒ。御借。り下。され。○  
 雨。の降。りまほ。差傘。でも。被。り  
 笠。でも。御借。りあ。され。○合羽。を。



上げまゝやう

第十章

彼方も。將碁を。御存トこの○私  
も。碁も。知りません○笛。琴。  
杯ハ。面白く。御坐りまゝて○音

樂も。好まされど。三絃ハ。餘  
る俗で。御坐りまゝ○彼娘ハ。  
琴も。上手で。御坐りおす○彼  
方ハ。芝居と。角力ハ。何き哉。  
御好きおするか○私も。何れも。



格別。好まません。○鞦韆ハ。好  
 だ。遊び道具で。御坐りませぬ。○  
 彼も。船乗の。稽古小。為りませぬ。  
 ○君ハ。舞と。御存じの。○私も。  
 流行唄と。好まません

第十一章

君ハ。能く。學文哉。御出精か  
 さる。○勉強せ給む。誰も。才氣  
 づ。増ません。○學校で。決  
 る。徒ら事と。致しません。○幼



さ時ふ。精出さぬを。年長けて。  
後悔して。何の益も。有りは  
せん。○世の中ふ。名高き人  
皆少き時。勉強した人で。御坐  
りまは。○先づ。吾邦の。學文が。

出來まして。後ふ。洋學をも。  
致しま。やう。○學文の間ふ。  
運動が。大事で。御坐りまは。○  
遊びふ。精が入りまはと。習た  
所を。皆念まて。仕まひまは。○



彼方ハ。何年。御脩業おされた  
○私オ。三年ヨ。なりました

第十二章

君ハ。地理學を。為されました  
○少シハ。學びました○地圖

オ。御持で。御坐りまーやう○  
私オ。地球儀を。持て居まは○  
日本ハ。何處小。有りまする○  
日本帝國ハ。亞細亞洲の。西南  
の。嶋國で。御坐りまは○南の



方小有る。二つあり嶋は。四國と。

九州で。御坐りまは。○北の方あり

嶋は。北海道で。御坐りまは。○

我國は。産物が。多く。御坐り

まは。○皇居は。武藏の。東京は。

御坐りまは。○大まふ。繁華で。

御坐りまは。

第十三章

彼方ま。東京の人で。御坐りま

ま。○東京は。何の國で。御坐



りまはる。○武藏の國で。御坐りぬ  
ま。○東海道。十五國の内。御  
坐りまはる。○私。肥後の者で。  
御坐ります。○西海道。十一國の。  
其一で。御坐りまはる。○彼は。英

吉利人。佛蘭西人。ま。ま。  
魯西亞人。○彼。米利堅人。  
御坐りまはる。○私の朋友は。久し  
く。日耳曼。遊學して。居まはる。  
○彼方の。御兄さん。此間支



那ふ。御出と。聞ま—たら。○尤  
い。兄者。印度まで。御用ふ。く。  
往きま—た。○何つ頃。御歸り。  
なされまはる。○ごふでも。秋ふ。  
成りま—やう

第十四章

私者。昨日。此處を。習ひま—た  
く。通ごとも。善く。理會りません  
○彼方者。此處の譯は。善く。御  
理會で。御坐りまはる。○私者。



少く。理會り兼る處が。有りま  
 せ。先生ふ。御問おされ。○彼人  
 ち。能く。講釋ふ。出來まよる。○  
 諳誦ち。別段上手で。御坐りま  
 せ。○彼方ち。書画が。御

得手で。御坐りませ。○彼ち。  
 算術が。熟鍊で。御坐りませ。○  
 窮理學ハ。餘程。六う敷。御坐り  
 ませ。○脩身學ち。大事で。御坐  
 りませ。○心乃惡るひ者ハ。何が



上手でも。役ふも。立ちません  
○彼方も。歴史學を成された  
か○方今。地理學と。致しませ

第十五章

彼人も。善く。兩親ふ。孝行を。

致しませ○何事も。兩親の。言  
付を。守りませ。悪る起事哉。致  
しません○彼娘も。針仕事かの。  
上手で。御坐りませ。何様ある。  
物ふも。善く。縫ひませ○彼



ハ。父母の。言付を。背きまゝに。  
徒ら事のと。致しまゝに。今日も。  
學校少く。先生このふ。強く叱ら  
まゝに。泣まゝに。〇何某ハ。虚を。  
言まゝに。彼の話を。一事も。實ハ。

御坐りません〇彼の人多。真  
實な人で。有り過ぎ。私ハ。大起  
に彼の人ハ。世話ぬ。おろまゝに  
〇悪るき人を。友達小。爲る者。  
身の爲小。おろません〇私の



附合ハ。誰モ。悪ム人ハ。有リ  
ません。○彼人モ。學文不。精出  
シテ。遊事ハ。好ミません

第十六章

彼方ハ。書籍ト。澤山。御所持ホ

ス。私モ。小學の書。一ト通り  
ホ。所持。致シませ。○彼方ハ。唐  
本。洋書モ。御持ホ。○彼  
人ハ。藏書家で。御坐リませ。○  
彼方の筆ハ。善い品で。御坐リ



まは。二三本。御譲りを。願ひた  
い。私ハ伯父より。唐筆。一箱  
貫ひました。私の眞書ハ。善く  
書けまは。彼方小。一本。進ト  
ま。やう。日本の紙ハ。性が善

く。御坐りまは。洋紙ハ。奇麗  
ふ。御坐りまは。私ハ。先日。唐  
紙の。善た品を。手小入りま  
た。彼方の。硯を。好き石を。  
御坐りまは。此墨ハ。色。悪



るい

第十七章

親の氣味。懸る事と。致して  
ありません。兄弟ハ。親  
せ福を。なりません。人の物を。

竊む者。盜賊で。御坐りませぬ。  
人の妨を。為さぬ様。心懸福を。  
ありません。人の善起ふとを。  
妬て者。なりません。吾グ。  
善き事と。自慢されば。必く



人小。笑をれまほ。○何事も。慎  
 るが。第一で。御坐りまほ。○疎  
 躁か人多。學文が。出來ません  
 ○人小。逢へむ。禮儀を。為祿バ。  
 ありません。○人を。誘ふも。惡

る起こすで。御坐りまほ。○先生  
 の教を。一々。慎と守りまほ。  
 必を。念きてハ。ありません

上羽勝衛纂小學會話篇卷之二 終



皇會言  
卷之二

肥後熊本 豐前屋太平

書 同 小嶋屋義八郎

同 珠數屋貞吉

林 同字土本町 書籍會社

肥前長崎全町 小野宗助

官許 東京芝大神宮前 岡田屋嘉七



